

成形圖說

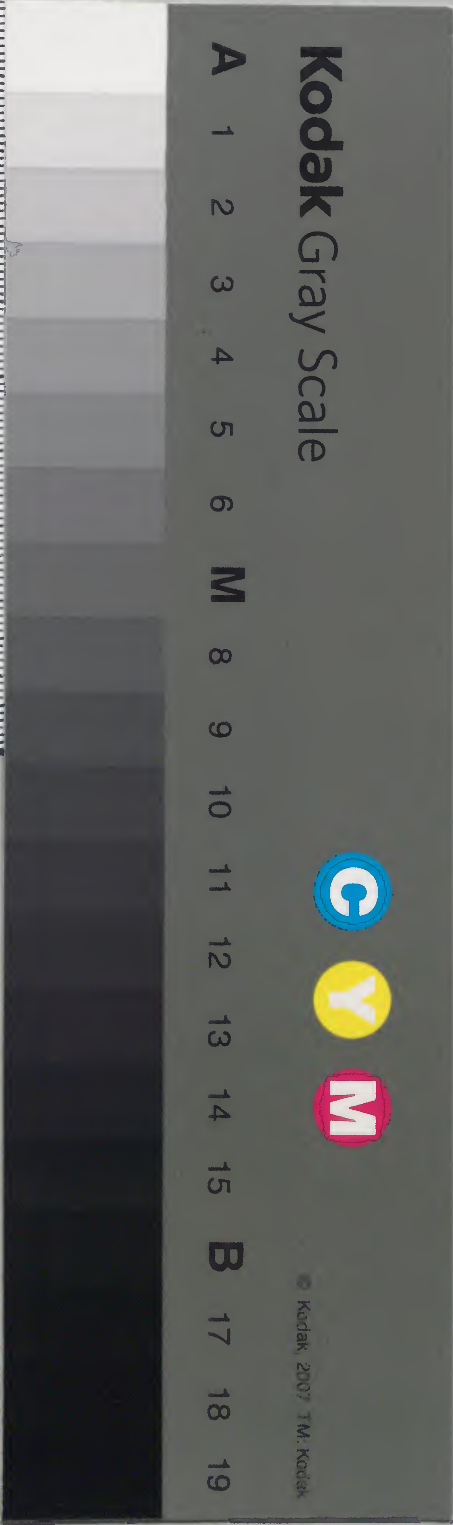
農事部
十四

省務商農
書圖和
號六第
冊共

庫文官政太
和書門
八三二
三〇冊架函號類

庫文閣內
和書
八三四二
三〇冊架函號類

內閣文庫	
番號	和 8342
冊數	30 (14)
函號	196 98



成形圖說卷之十四

目錄

苞裏 タワラツト

量秤 マスハカリ

度羅 タカリシタミ

蓑笠 ミノカサ

篲畚 コフシ

篠箒 シノカハリ

笥箕 イサル

籃檐 カダミ アホコ

附科 ツケ

槩 カキ

附

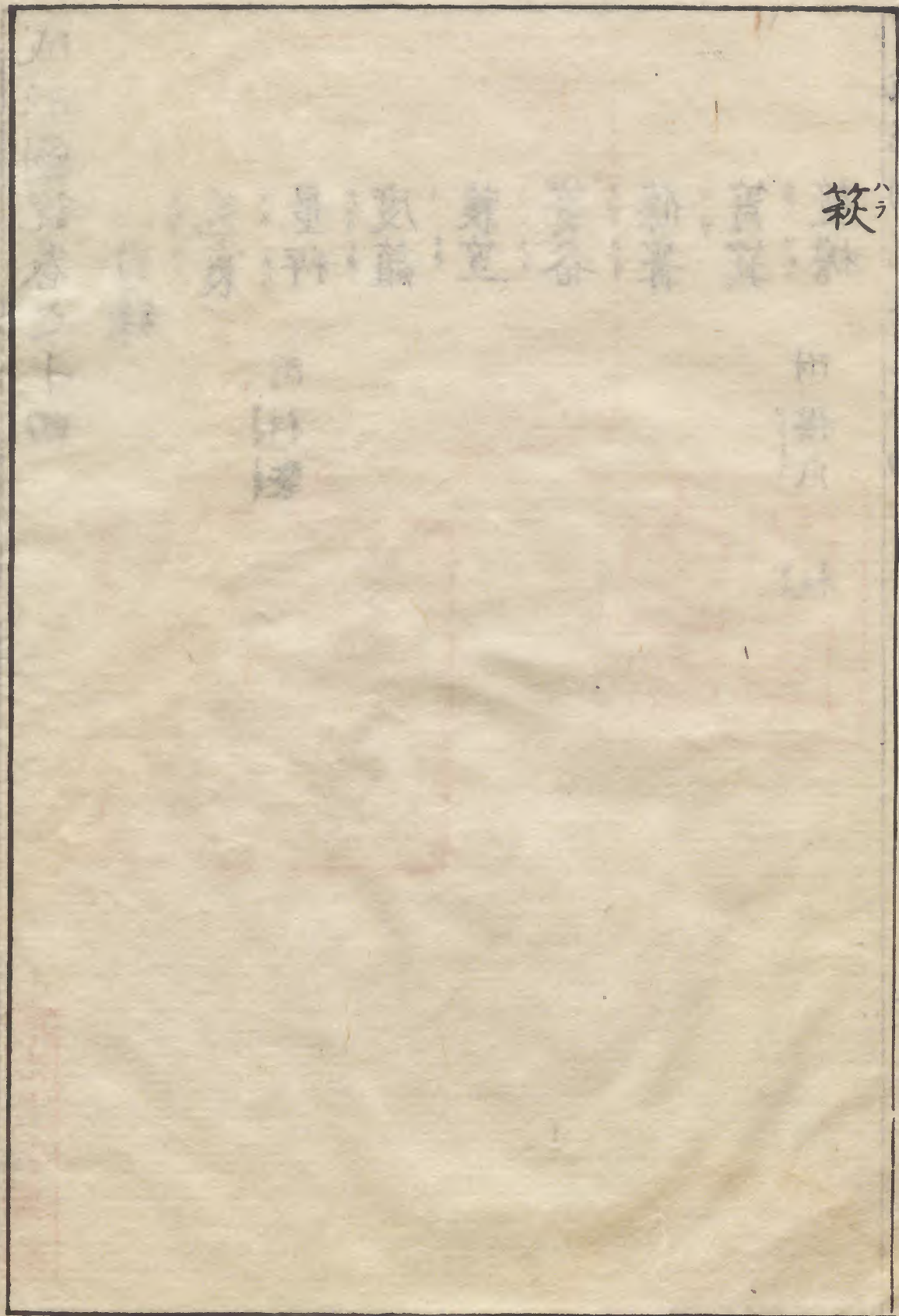
搭瓜 ツトマキ



成形圖說卷之十四

明治十一年購求

籟



成形圖說卷之十四

農事部類 農具

俵 類聚國史の俵ハ和字ふハ蓋把釋の畧一説は田釋也
日次紀曰歳且海嶺と俵子と稱ハ其状は儼るの祝詞也

如麻須 書紀裏の字 字知麻伎 抄卷の謂は散米と云ふ

や或曰俵ハ字書に散也とわハハ散米 麻留 日向方言
といふなり 安良麻伎 和名鈔引唐韻苞苴裏魚肉今も

風土記殘篇 幾丸と云ふ 安良麻伎 和名鈔引唐韻苞苴裏魚肉今も
苞 音字正字通今人混包 又口 玉堂雜字布袋とあり○

也年貢米戔納る者にて官より借る所と云梅は今西州
の俗名の字とて蒲筍の字と云又口の類ある

蕃名ストロロカナストル

成形圖說卷之十四

俵てふ者書紀よハ見る所なしはもど雑式等既よ大の
 一の載られ志のなふふよりゆえり又諸國風土記
 の中に公穀幾九假粟幾九とある九ハ即俵といふ
 つし今も日向國人ハ俵といふ九といひ是日向ハ太
 むりー 神聖都志あるの舊墟ありハ伊勢也日向の法
 世ノ言靈ハ散失せしハ傳ふるわざおほく後とて
 よど四季おぼよばりめてりしハ假物よきとて
 婦しとるんおとく壽て伊勢加茂山野宮ふとおほひ
 妻のぬりうきとていひておくともいふと積と
 ひ又ゆるとげあわうかきぬるといひ候とかげことい

ひ位とみ水何をばとらひおとくとおゆるといひり
 ひとら原ふとそのおほとなきせらふとくさ按よ
 孝徳紀よ裏の字加麻須とあるものいふ一の俵の事
 よて後ハ蒲筍てふものぞ遺製とてし字書よ裏ハ
 苞也と注して平壤録よ積米豆十六萬八千餘包とある
 包ハ即俵とおれし物土の俵ハ井網代ありとも米一俵
 の收票よ一包とてはる太平記よ龍宮神の頼よて取
 原秀郷百足の蛭松と射躰とて就神悦て夷つと極と
 欵待ス刀一振卷絹一鎧一領頸詰くる俵一赤洞の撞鐘
 つと與つハ俵ハ中ある納物と取とてとるらりり間

たり納税所にて量て後始て俵に入る米と入り俵は始
 米と入り子堅又ふし美旨ハ横口と穿るるものあり
 俗或ハ横俵といふり じり俵とふわのハ二升以上五升盛乃
 きの少て今乃裏れぼとし 蝦夷の比ハ横口ハ然レ裏と
 加麻須とも呼レ今俵とふものめて一統ハ俵
 の大きくするは上ノ納子料又熟一るるや類聚國
 史延曆十七年十月勅量收糶穀斗斛有限又曰糶一俵二
 升己上穀亦斛別五升己上と云々雜式曰公私運米五斗
 為俵仍用三俵為駄是五斗俵の始めて孟穀米より凡駄
 荷馬の荷の重の積と四十貫といふと五斗俵二俵と負
 さら積といふの之法國よりきて六斗俵四斗俵三斗俵

二斗俵とりの不同あり大りハ三斗五斗入と通例と
 以上方ハ四斗俵河東北ハ五斗俵多し又量取ハ三
 斗五升の俵多し三斗七升收も及ふといふ俵米久
 しく儲蓄ハ耗る持運ハ眼あるとすの欠立より此歛
 法ハ加ハ買束三斗五升一俵とある又二斗の四斗と
 加て三斗七升入ると四斗入ハ四斗二升ふとの
 又從て竊取とのありて廩米の稟と交款とのは
 常に定法より七升同少き俵とある之ふて後世俵
 毎子年表名主花方掛取何らし何ぐりふといふ名牌と
 俵の中子掃て奸濫と防く謀となりやと是と申札やといふ
 然とも穀万俵のふやゆきも他りくく公ハ新惠と

加へら勢も猶吏従て私とあるものたえりて
 と防りば彼と破新とと氣の屋成穿りて
 字と交れとの儀のいふふははた子罵り忽れ然
 に定式の入よともあはるははた子善堂様やり
 と交さるははた子多きも交はるははた子
 ことし
胎謀録云李番官監察御史得廩米母量之三
 斛而贏問故對曰御史米不稟問車傭幾何對
 曰御使不償也母怒教歸餘米償其傭也
又月廩
 官吏無得收斗餘註斗餘緊量之外又取其餘
 也是欠少りて量出と履ふりて禁りり也
 共ふ米と袋と納りし糧米のよあはるははた子
 袋と納しかつげりと今ハ賤布と呼へりし大國玉

命を兄の爲に袋と負てと古事記に及るり而
 今の又黒と儀と踐るる像也はハ贅より儀と負て
 濟ふはし其傳も此神負袋者とも賤しきは了見
 後ハつる所由ハ凡て大なる功業と立むとす人ハ
 細事ハハかくははぬものといふ
此遺のさるは太古ハ袋負るの俗ありて物土にて
 足あり
 之似兼ある子路みんと軍將を志すは功業ととある
 子路と義のあはるして衛子事て大勇と失ひ祿の爲
 子絶纓と結しは惜むる
說文子路負重道遠不擇地
 而休家貧親老不擇祿而昔
 者由事二親之時常食藜藿之實而為負米百里外親没之
 後南遊於楚從車數乘積粟萬鍾累茵而坐列鼎而食願食
 成形圖說卷之十四
 六

藝薈為親負米之時不可復得也枯魚銜索霜露不停賢者
 欲養二親之壽如過隙草木欲長霜露不停賢者欲養二親
 不待故曰家貧親老不擇祿而仕也子路負米之袋二親
 入焉しある魚子と後の画ある子路負米の袋ハ斯方の
 俵あり是と大黒の俵踐し像つく蜻蛉日記曰安和天
 地とふくろるぬいてと瀧はいと徳しくありてと阿り
 俵衣も此等と引るりいふ一の記詞あるへしとん
 えり又曰とさふき人いふはうさうさうわちよ
 里井これハえ袋ある地さりのでくひふとすりおど
 にわりの子きてきぬれとさぬく阿ちふとて枕を
 にえふくろに入らるる箭楯槍劍ふとて阿くとと瀧
 ぞと阿ふにはいおて阿かしどのつといひ阿ハいとよ

拾遺集物名

筑紫より

くもて

来れと

つとも

太刀の

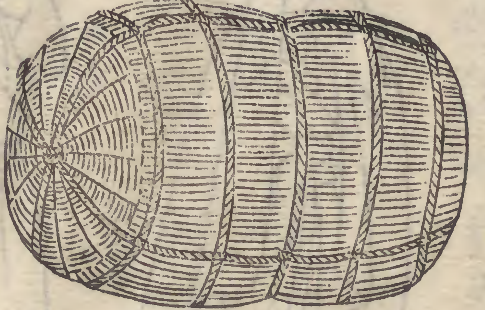
緒革乃

端のそ

阿は

蕘笥

蒲笥

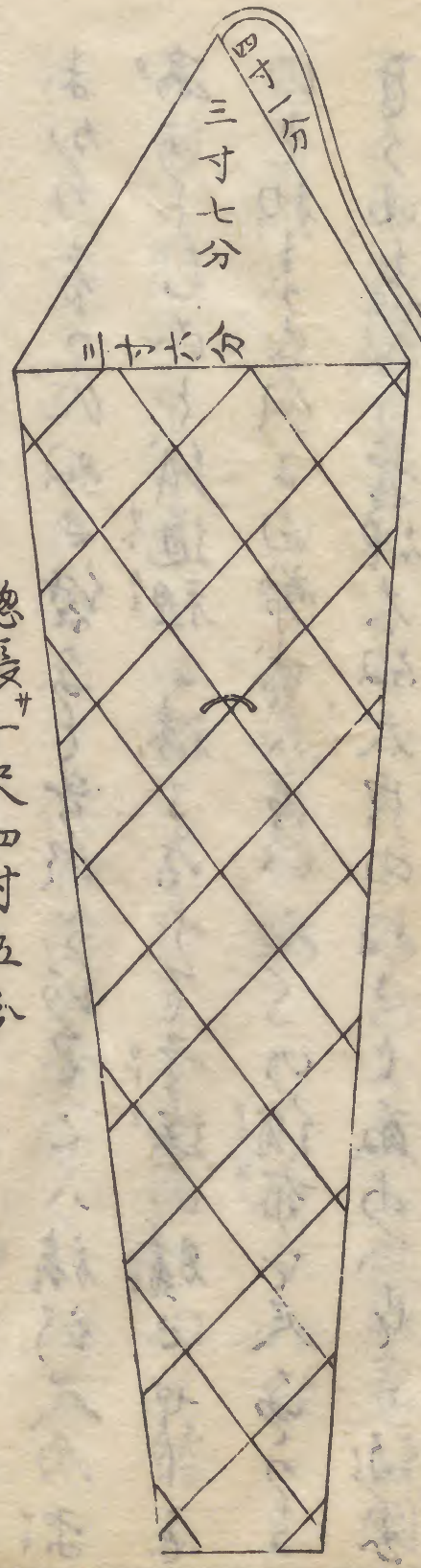


尾張熱田廟再興卷物子作り
 奥書に享祿二年己午二月吉旦
 とあるは婢と云々するハ髪と
 さるは持所古の風とてうけ
 さし袷也衣紋又ハ何とてと袷
 よいきてとてとせしとてハ次ハ
 側仕の女あしへし髪と髪より
 白布とて頭と髪は布の裏
 端と左右と垂るるハ即今も程
 言の女は解あり主の婦人との
 被衣してはとてある表衣と
 ふし市女笠とかぶりたり當時
 常人の女装おもひ認るへし



幣袋

表青地等の金入裏布白組金紋紗と用
 緒長六寸リケ紐中懸緒七分リケ紐



惣長一尺四寸五分

万葉集千をなふた神乃みさきり小幣留つるいとふ命は
 おとちりくがとめ おもちりく即父母とて人神と
 縁といふゆのその本意かくはとて父母とて愛敬
 の流おのけり河よ阿をたれて遂に以て君とて
 せり又幣とて心葉とては赤心の表示あるへし
 集み清く清くぬちきり弦つるる赤心は向の神を
 る信かりりる花のゆき花のぬき花のつるる也
 立ふしる花のぬき花のつるる也

し之は擡まじりしハ楯鎧刀劔の袋と成ふべて得袋と
いひしある一し後ハ菊蓑と呼ふものハ種々のもの包
こいるあり古事記ハ燧袋ハ已又万葉ハ篋袋とあり
者ハ行旅ハ具ふハ羈客に神るものといつり又幣袋
わり後撰集ハ相うさひる人の阿かきさばり越へ
まかりありにぬさ袋とせんとありこハ旅人ハ
あつむむと瓜道祖ハ禱る爲として其途の贖とせし
のそ初まきハハ回幣袋ハ古くハ絹布ハ尺あり
きりゆきあり菅蓑太ぬ太座のぬきと取あへり
ふハ袋ハ神子切ると袋ハ入てきりゆきとまけハ

ほざりしとありし今やうの錢別あると事ハ川
一ハ人ハ神り又人ハもハ志とてむくハ恩贖と分明
よきとてしうとて風と親こもらからあハま
のぢらハもてすりよも阿しむりハのふとぬき袋
んぞに阿しんハせわれハ使と使の費なくわら
うとまりと源氏漢よとの丹袋とてよけ富直人の夜
袋とて今番袋と云韓文ハ襦袢直とあり又太田道灌
の群母よきのハ追阿ハ喜怒を入せし辱んふし袋ハ
やうハきし是ハ縁ハ袋とて筆のやうあるものも
一説ハるんハ袋ハおのこの軀殼の事とて因今まで

妄想と入置しとつとつや○宇治拾遺子越前國伊良
 縁の世恒々袋の米と流りつと輒と一斗のつきや
 且しといふも又東鑑建久三年五月八日為大上
 天皇四十九日御佛事頼朝卿百僧供養布施の中、袋米
 一也と有り○王肅喪服要記孔子云五穀囊者起伯夷叔
 齊不食周粟而餓死於首陽山恐魂之飢故作五穀囊○漢
 書東方朔云侏儒長三尺餘俸一囊粟錢二百四十臣朔長
 九尺餘亦一囊粟錢二百四十侏儒飽欲死臣朔飢欲死○
 唐史李泌請以二月朔為中和節民間以青囊盛百穀之種
 五雜組と私夫と米囊太平御覽云古行者之食以布囊貯
 よかくせしあといふ

粮布囊為裏粮之用詩云乃裏餓粮於橐於囊傳大曰橐三

圖會第幾可用盛種者淮南子急就第等第皆所盛米穀
 ○字彙斷幘也載盛米者或布為之又米櫃也加良度計夫
 通計志櫃ふとつ三才圖會の穀匣あり方木層連
 也重筆筒のやうに引出ふて米と盛置ふのあり
 家裏萬葉集道待裏山裏人聲歎ふのあり
 山山裏山今昔旅裏情輔都裏伊勢
 濱裏同上海裏物語歌集都裏伊勢
 黄泉裏榮花宮毛日記○毛或ハ
 裏糧孟裏費鶴林玉露○裏ハ行人の持とのよ
 書言故事遠土宜類書纂要遊于外境以本
 行必有行囊土宜土所產之物送人曰土宜
 遺土實土毛土產以上東京夢華錄並
 蕃名

是等皆其家子然て某乃裏と呼り詠りあり又何よて
と引包と持込りしむとにかくはいひし様つとんを
てら心饋あどハ今と鄙人の飯裏とて釋きてかひ包め
るあり後ハ家裏より紅宮毛とてつとこハ伊勢 大神
宮へ参拜の人あはよきりて神宮の麻袂と名とし長鮑
笠杓あんどの土毛と持歸て参宮の裏とし親戚朋友
餉上りしより宮毛と名けしと今今の際答よあ引絲
よて結紐ハ長伸鮑と副造鮑ハ打鮑の義よて鮑乃所
いつわあ引ハ赤ハ幣の事子起りの麻とけむに區一皮
と去りしものあてむう一此ハ麻あとし好恒集にあり

の白絲とてと云款と見よとこいつり又万葉の哥よ
伊勢の海乃奥津白波玉よもがけしとて妹奴あつと
せんともあは伊勢ハ宮箭とよあもやむりハ京師よ
已伊勢東路よまうで下る人くと逢坂の笑あて紅と歸
も送迎てとのせし目ハ坂の類ありと紅旅乃平安を
禱てしむとに類をけなげてよ向てよ若法ハ負初門
來人の管持もも坂迎てよ河津朝日わ々昔物鏡よ信濃
寺よ任して國へりくる耐坂向の答あどとていふ是
がら逢坂てよ若法よしハ神功卷よと見よたると今伏見
の扇江の錦画あとも土産の類よあつとハ赤との

斗也

麻須書紀〇和名鈔引切韻升十合器也知多少謂之量凡俗
 小量三合より一口二寸三分深一合二合二合五合の量
 法五抄三撮強本邦の量小半量即二合五合の量
 寸五重深一寸七分一毛あり或ハ口三寸五分深一寸
 或ハ深二寸八分と云ハ者ハ非也升即十合あり口
 寸七分五升量の時二束稻春得米五升と云ハ者ハ非也
 米と遺るるし七升量口九寸五分深四寸五分深四寸五分
 巴方六尺五分深咸大升政事大升古の代格〇今按ハ三升
 五寸八分ハ八重

と受とハ二升五合と受とハ三升と受とハ七升五合より
 大升ハ二升五合と受とハ三升と受とハ七升五合より
 桶と受とハ二升五合と受とハ三升と受とハ七升五合より
 一斗と受とハ二升五合と受とハ三升と受とハ七升五合より

量書經同律度量衡律歷志量者論合升斗斛也〇唐高祖
 武德九年檢校諸國量者論合升斗斛也〇唐高祖
 二百粒と容之と論と云大斗大量以上漢書貨
 註大斗者異於量米粟大升說文斗斗角月令集說
 之斗也今俗猶有大斗大升也斗角月令集說
 斛斗文獻通考文思院造一石斛斗法梨翻譯名義集天
 用火印下諸轉運司依式製造

蕃名

凡量斗の起率ハ秬粟より積出る者と云々次第主抄
 より始る或謂撮ハ四圭ふて二十四粟三指撮之の名也

米百坂四十坂とあるを併けりて一し其葉は百積の
船より一ハ即百斛以上と積載船よりて々も亦の丈と
度て其百斛積といふハ古語の遺もるなり書紀に千斛
と訓古事記にハ尺讀て麻佐加といひし又十度とも
えて曾波の反佐あり佐加ハ曾波加利の畧ともい
十と曾と訓ハ五十八の六とし按漢志に升者登
合之量也成也進也と注せしと次第に數と登りり
てより麻須とも佐加ともいふハおのりり之に合
るとる一し舒明紀十二年十月始定斗升斤兩文武紀
慶雲二年始造度量賜諸國元明紀和銅六年頒下權衡度

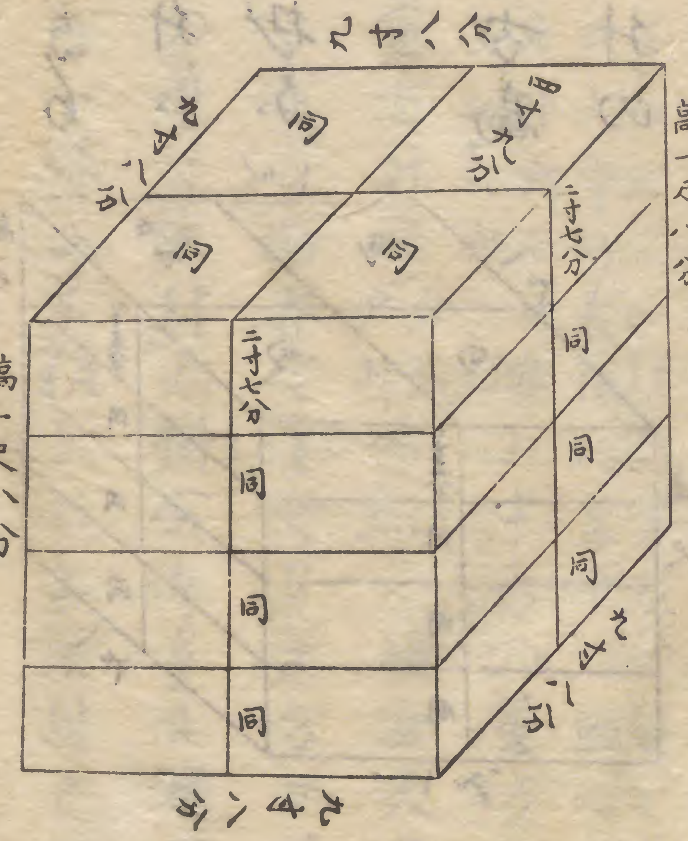
量於天下諸國桓武紀延曆十七年十月勅度量權衡先有
製^中升尺等類就大截省依法平校求絶奸源若違此制真
嚴科令曰量十合為升三升為大升十升為斗十斗為斛雜
式曰凡度量權衡者官私悉用大此丈量小量の制わらし
也蓋慶雲より和銅より多るをいふ謂古量なる者も
今のハ合量乎蓋古量の一升ハ合量もてハ合六勺四抄
許今記抄にハ升量あり此量もて合量の半一
斗と料に一斗二升ありと一斗一升六
合三勺の扶桑畧記後三條天皇延久四年九月廿九日
詔斗升法可據用長保例この律代に穀倉院の宣旨升以
造り玉ふと東齋隨筆にもあるなり
大日本史曰後三
條天皇欲審量制命

新作器使藏人頭藤原資仲督之帝自抽簾截竹為之準
 成資仲等率藏人出納小舍人量殿沙試之而取穀倉院米
 量之後世遵用謂之宣旨升又造方櫃容一斛以石為錘衡
 其輕重器傳在穀倉院按東齋隨筆曰斛十斗也又石
 直子斛の音よ淺大くは延久の頃穀倉院の斛と造り
 子始る也○伊藤氏曰大學衍義補始皇平六國之初書云
 一衡石丈尺所書之石非鈞石之按子中古の量方寸深
 石也後世以斛為石其始此歟
 二寸半と云者所謂宣旨升乎今或ハ江後西天皇實文
 九年京升寸法一同み定る俗亦今量と云方四寸九分
 深二寸七分也中古の量と京升と料合とるは京升ハ米
 六勺程おほし官より下給ふ米糧あぶみ京升と云ハ
 即寛文中制らるる公量の六とあり
 古升ハ口五寸深二寸五分是一分四方の物數六万二千

五百あり是と古升の法より五六也今升の六四八二七と
 古升乃六二五とて除ハて餘ハて餘二千三百二十七あり米
 小積ハ三合五夕強あり
 之小依ハ古升の一升ハ
 今升乃九合六夕抄ふ
 る也し
 十六の一分五寸四方高
 二寸五分是古量一升の
 製也

今京升法其積ハ陸六十四坪拾肆八合二勺七抄萬捌千貳百漆拾萬々實積算法

古制は高八分増て一尺八分とて同徑二分減て四寸八分四方とて 其寸積千二十七坪二分三厘二毛 此石數一斗六升 分 坪百三十七坪十二 百三十二坪十六 割一分六厘四子 八百二十七坪 是今量一升の積也 古製一升の方五寸七分一分減し今四寸九分四方とて深二寸五分と二分増し今二寸七分とて 升法六四



八二七 但口内斜子鍍梁あり此内梁の積減少し今京升の梁上闊三分下闊七厘高二分長七寸弱あり右梁と一分方の物數子積ハ二百五十九也一升の積六百四子八百二十七より梁積と減りハ六百四子五百六十八とあり此今升所容の實積あり 民部省厨升十合升あり山科升東大寺十合升其形同し かくざしとも受る所ハ八合の十合升より雜令所謂十合と升とあるの一升量也但古升の一升二合ハ今升の九合六分餘りて加茂祖所謂九合六分あり此より四寸と足て々の一升量とて

民部省厨升火印

民部
省厨

拾合

回

宣字升

火印

神戶氏藏民部省厨升

山科升 ○又古量日宣字

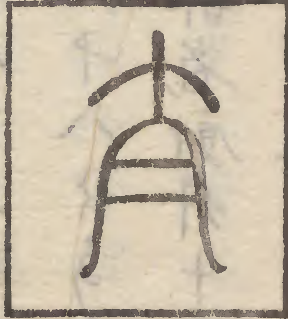
印烙の者あり疑ハ即宣

昔升ありハ又古量日

深一寸五分 徑二寸八分

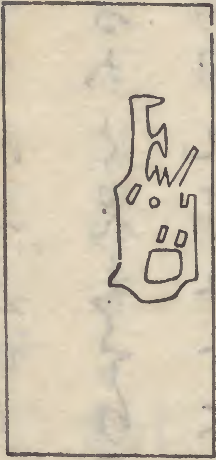
五厘の者あり火印

太孝齋の三字あり



深一寸五分
徑二寸八分
五厘

横



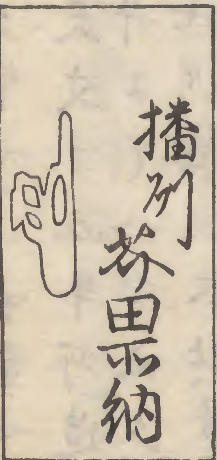
升中播磨國姫路芥田氏蔵升
火印

底

或曰相模澁倉鶴岡安藤升あり廣五
寸七分深二寸二分銘日天正十八年
安藤判あり即此升小して今澁倉
中社寺年貢所納子用るなり又曰伊
豆相模字子原原升と云ハ京升と
日大より當時安藤豊前守原原升の
字ありと云ハ此升の事ありハ

播磨
芥田納

横



大寶量 和銅量 以上續紀 宣旨升 太孝升 以上既見 反錢升

天文十五年所造 今錢升 天文十六年二月 花園升 元年

升よて八合五勺 今升よて六合六勺 今升よて六合八勺 今升よて九合

七月田 本供量 今升よて六合六勺 原量 今升よて八合八勺 川

上量 今升よて六合六勺 拾合量 今升よて八合六勺 寺量 今升よて六合

量 同上○本供量 以下南 稻荷御出講量 東寺稻荷律會

合よ六勺 一 即令格よ謂大升也 西州北國等皆大升よ用う古

今名所小差ナカヒ阿り江源武鑑よ依る本義實此この越造也

る大と見えるり○大和法隆寺よて太子量よ呼ぶる力の

阿り九寸五分に三寸七分今升よて五升一合よ夕強と

入也

又同法隆寺よ釣量よて重三貫三

而同餘の銅斗あ 重大斗 尺二寸

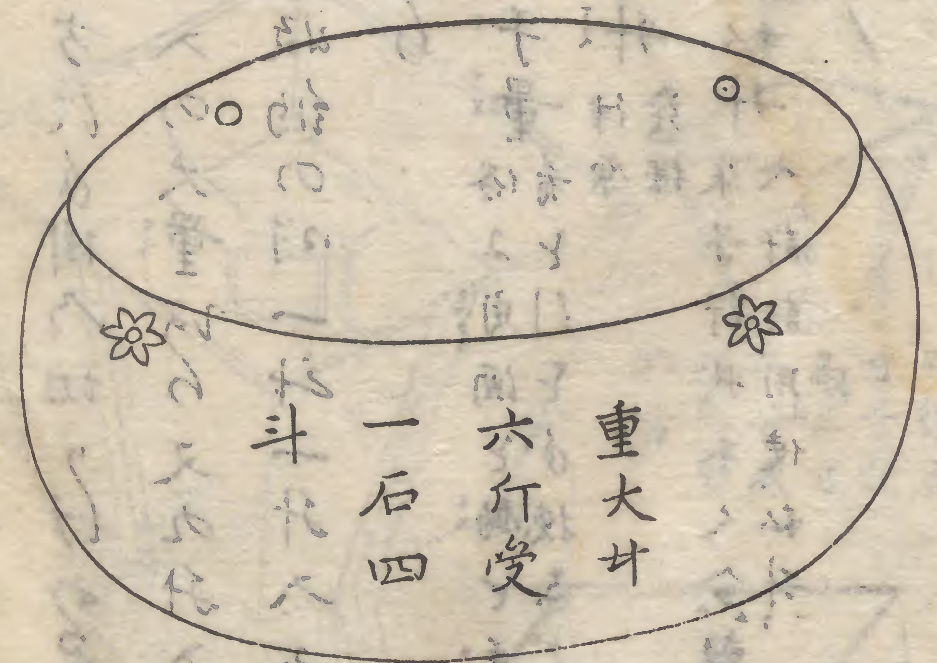
已是南史蕭思話 六斤受 五分腰

傳子思話常所用 一石四 周七尺

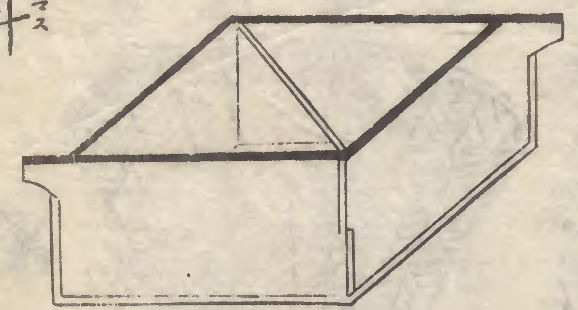
銅斗といふの類 八寸三

分深一

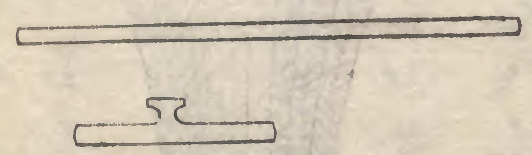
尺四分



斗ト



槩ト



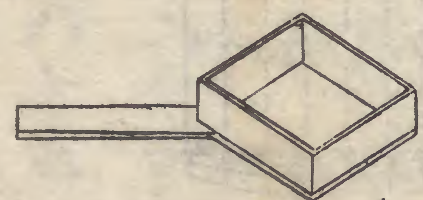
升シヨウ



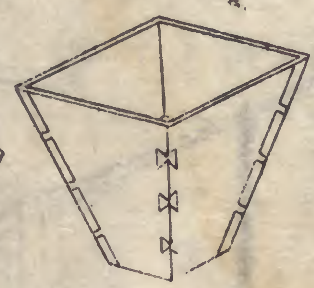
合カフ



料斗リョウト

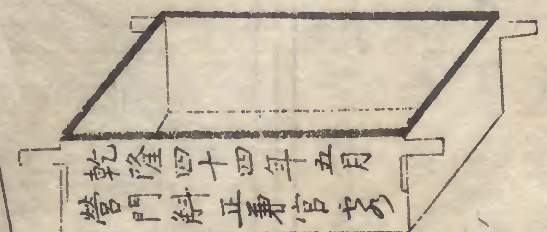


清升シヨウ



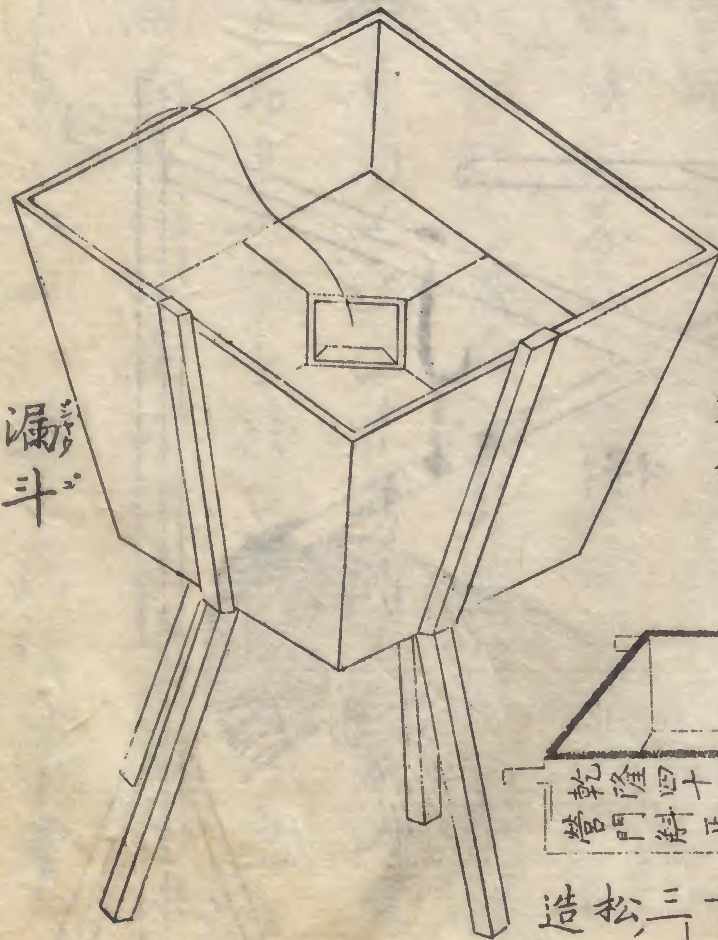
口徑五寸一分
高三寸
底徑二寸
六分

朝鮮斛コソウソク



造松三一深寸尺長
之材寸尺各廣五二

漏斗ロウト



蕃名

江戸増上寺の靈屋領代官の方に一斗量あり縁子渡の
 尺中子梁河り下の四方に掛乃切りけわると是より京
 量と称す又一斗一升入の大量あり又九升入の河下儀
 八斗二升入の斗して收納の時一斗一升入めては其量
 九升入めて一斗量あり

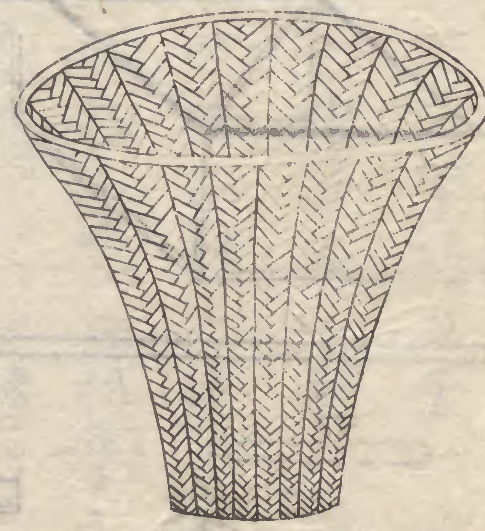
國量クニノリ 一國くの量と
 武佐判フサノハ 亦云近江量
 遣升ツカヒノセ 律原
 私升シラノセ 朱子行狀本令韓人許請用使私升

手量テリヤク 俗よ自酒と酌と手盛とる
 量リヤク 看と引とよ扱ふとあり

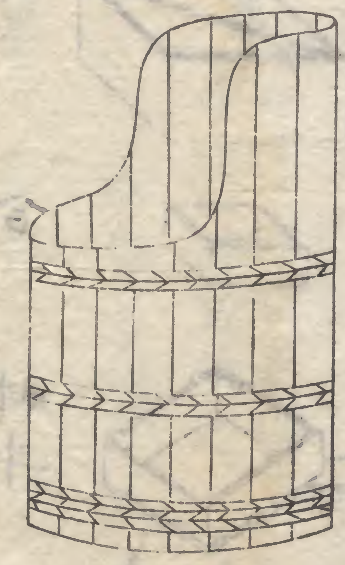
家量ケリヤク 左傳以家量貸而以公量收之
 畧リヤク 雄リヤク

私斗シラト 國經

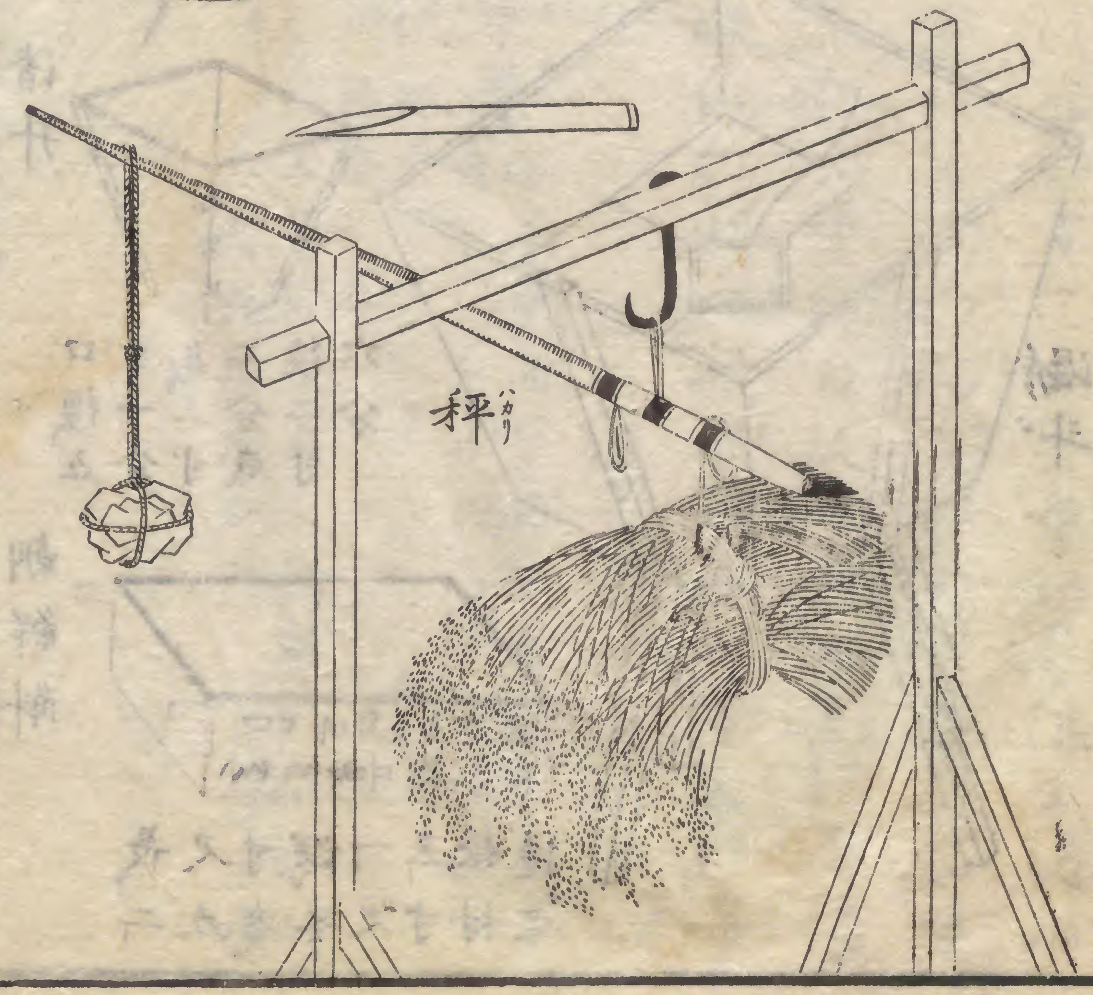
籬



斗桶



秤



武佐判量ハ近江武佐よりあるハ合入ありぬハ合量
 とも唱ふ 武佐ハ近江の地あり兼良公の室の若川記
 けとてともあるなりうべ 天文十三年依々本義實百
 姓の租と納ハ二合と減して收り為ハ近江武佐の倉ハ
 て造る所是不許と存垣の志ありて末代の惠政と稱せ
 己孟嘗君傳ハ田常收賦税于民以大斗出以小斗收齊民
 歎之と何り義實亂世費用不給の中ありて如此の惠慮
 あるハ千石の政蹟とありし終と終ハ或ハ之と石
 田量とも唱へ下石田ハ成ハ万石の地と十万石ハ耕
 とて八合入と用ぬハとていふハ愚者ハ誤る量斗ハ

今々の眼前まで取あつたふわのあるとか、家地ふと
 して何ふし民の信儀をさやハ又一説は、葉田猪家の製
 る所より後世小量と印烙あまのものと説ふむと
 呼ぶハ元、吾判とふふとの説也と云々、武佐判量寸
 法、方四寸六分半深二寸三分八厘半深、
 武田氏領地の時より始ると云、旅籠量京升まで七合
 五勺入るり、同半量京升まで三合七勺五抄入るり
 同小半量京升まで一合八勺七抄五撮入るり、此ハ一國
 まで行る國量不くと多しといへとも、
 酒量一名柄附量、の参伐星の形是に似たり、故に酒量星
 の名あり、此、酒醋油と料、今この斗量は、
 二合半、深一寸六分二厘、
 一合、深一寸四分七厘、
 五合、深二寸九分六厘、
 一升、深四寸九分、
 南圓寺

こと猪相、
 水ミヅ量リヤウ製セイ 一合 深一寸四分七厘
 二合半 深一寸六分二厘
 三合 深一寸九分六厘
 五合 深二寸九分六厘
 一升 深四寸九分
 南圓寺
 科斗 史記張儀傳、即酒量あり、伊藤氏
 尺謂其柄也、蓋斗の長柄あり、
 太祖祝、曰酒者天之美、祿何惜、不令飲之、謂王審琦曰、天必
 賜卿酒量、酒量ハ酒
 の飲量といふ
 登加伎 和名 量懸 亦云 梁 亦弦の字を用俗云、渡金量
 巴田録、改梁
 斗格類書
 和名、鈔引、禮記注、梁平斗斛者也、
 說文、杙平也、漢書以井水準其梁也、
 成形圖說卷之十四
 二十一

蕃名

粟寸法 一斗量の粟ハ二寸六分 七升ハ二寸三分

五升ハ二寸二分 一升ハ一寸二分 或謂粟元定式ありし

の掛るけ長くゆき此寸法ハ粟の本口の徑より凡斗量ハ楕材にてゆき一升より下ハ其端を執て押

及を故杉并字凡俗間己みハ粟を恒く何て他みハ杜く

何て平みゆきと量取ると盗とみて免る○明律

云凡各倉收受税糧聽令納戸親自行粟平斛交收作數支

銷依令准除折耗若倉官斗級不令納戸行粟踢斛淋失多

收斛面者杖六十若以附餘糧數計贓重者坐贓論罪止杖

一百物部氏解曰納戸ハ多の百姓の中より粟とめて

るあり○踢斛ハ量とて足て踢て多く入やうとる斯

方のおとしゆき此の數より○淋失ハ量の上より米

と大ばし掛て令盛高料よりとる此とあり斯方ハ按西

てあえ米起料ともる皆倉役の不悛と紀也

土ハ其量法一向ニ定規あり大率と粟ハ周一升此方

八勺九抄餘あり四升と一豆と博雅子升四四豆と一

區と一斗六升此方今ハ五區と一金と或作舖六斗

斗此方今五升二釜と庚と一斛六斗此方今一五庚と

七合四勺也八斛○左傳子十釜二鍾と秉と一十六斛此方今

五合二勺○小尔雅ハ二角と豆と二釜有半と庚と

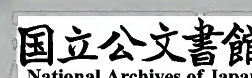
以二藪有半と缶と四斛あり二缶と鍾と八斛あり

漢書子牛一尺ハ三十六斛と駕と云ハ本邦の一

石六斗と抵と云唐宋以來ハ五斗為斛二斛為石故西

土の一斛ハ 本邦の五斗餘あり度量衡考を按じ
漢一升ハ此方今の九勺三抄一撮二圭九粟 漢一合ハ此方今の九抄
三撮一圭二粟あり漢一勺ハ此方今の九撮三圭一粟二あり 魏晉一升ハ此方今の
一合零三抄 宋齊一升ハ此方今の二合零八抄 梁陳
一升ハ此方今此一合一勺八抄四々三 隋一升ハ此方
今の一合三勺九抄四八 唐一升ハ此方今の四合一勺
八抄四々三 唐詩ニ謂李白一斗詩百篇 宋一升ハ此方
今の三合二勺零 元一升ハ此方今の四合六勺三抄
明一升ハ此方今の五合七勺一抄四又明新製の五斗量
とれハ其一石ハ此方今の四斗九升九合零七抄

清一升ハ此方今の五合八勺四抄七撮あり 朱氏談綺曰
彼の米一斛ハ我の五斗八升四合七勺あり 唐山の升不
同より餘姚の升ハ日本の四合と一升とを是城郷升と
云官升ハ六升と一升とを是と云ふ不河内南の升を
日本此ハ合五勺と一升とを是と云ふ不河内南の升を
勺は日率の升なり 按今清國部升ハ戸部より頒出凡
其式様江南一斗入の升を正年貢上納に用り即 本邦
の六升を容民皆に用りハ各省より一二合の差あり
又米一斛ハ五斗より二斛と一石より重百三十斤儀
ハ通例五斗儀あり一石代限凡三十五六每一升ハ此
方の五合強と云凡西地の量ハ口濶く度狭し又箱の



おとくして四方の外と鍍して鍍してあり沖繩人曰
福建了市店の私量ハ竹筒より西川氏曰西地升又交易
の諸色何と斤量とハ賣買にあり長崎一あり者和蘭の
如きと竹筒の量とハ糧米の多少とハかり波一升と号
あり者 本邦の五合弱より其餘外表法國管量あり中
井氏逸史曰朝鮮量の一斗當我三升五合以十五斗為一
石當我五斗五合量の韓語とシウテイと云

^{オホハカリ}大量の量既古事記より大殿祭祝詞天津御量とあり是其名の自て出る所あり今俗斤兩と号

稱延喜式蓋大小通波介俚と譯今俗は鑿等と波加利漢語と云大抵二百以
上の物と云即秤あり又加良波加利漢語と云大抵二百以
天平と云即秤あり又長首上毛野同氏多奇波世三世孫久比崇峻御世被遣
吳國雜寢物為交易其中有吳權其名云波賀理久比奏曰
吳國以懸定萬と云是即加良波加利なりハ此皆知伎利
即小秤あり関東よりハ伎と濁音と号ハ斤兩即大
等秤ハ宋太宗淳和中初て製さる也と云斤兩即大
也亦斤量と

秤音稱廣韻正斤兩也又云俗稱字唐韻稱音再知輕重
秤也按文獻通考云淳化三年秤無準而造各三毫懸
星以準之志加了明方回瀛奎律髓載唐包何賦得秤
送孟孺卿詩云鈎懸新月吐衡衆星隨是唐の時既子秤
二星ありたり宋又其準ありと權衡尚書疏權衡一物
りのおほつらふさるや權衡也稱上謂之衡一稱
鍾謂之權律曆志二衡平也權重也數度行子權衡之
用有二或用斤或用兩類經附翼二衡有小有大總名曰

二七をかりは七兩のよし、ろくろりひり、八兩と波加
 利と讀しあるし。説文は春分禾生夏至昏景可度禾有
秒秋分而秒定律數十二秒當一分十
分、為寸其重以十二粟為一分十二分、為銖、是景と度て
其救の重と分りた兩と波加利とひり、きなり
 今凡四匁と一兩と凡四十兩と唐一斤と凡白銀一兩八
 四匁三分十兩一枚と凡即四十二匁凡金一分重一匁一
 分九厘慶長一分金重一匁二分〇一兩八四匁七分六厘
文金一分重八分七厘五毛
慶長小銀重四匁八分文金小銀重三匁五分〇黄金は大
銀也天正の初に製其一枚金は十兩銀は十枚也是より
前ハ砂金也今の大銀小銀ハ文縁の初に製する昔の金と
別也今小銀六匁大銀一枚七兩二分又一兩銀十枚や
又紅花一斤百匁五倍子八百三十匁入百六十匁是と唐
目一斤と云百八十匁是と當銀一斤と云又二百十匁沈

番一斤二百五十匁鉛錫の類又二百二十匁と平野目と
 云三百匁と分銅同ふといふがよし、新井氏曰唐山の
 石ハ秤衡としてそのつと用う一石の重百斤ハ日本
 邦乃秤として十九貫目あり伊藤氏曰石本權之名所謂銖
 兩鈞斤石三十斤、為鈞百二十斤、為石是也、豈秦漢以來因
 其所容之重遂以名量歟石字亦作碩拓今按ハ秤又稱量
 と稱ととと東福と懸穀禾の輕重と量は收納する所不
 已延喜式ハ小税大税斤税と云わりの小税ハ以一把為
 東大税以五把為東と云りて斤税ハ其わらんと秤
 て收と懸税と云又斤税ハ大斤大半斤ふとの別あり也

丁今の大尺ともいふは小尺より二寸を加ふるの曲
 尺にて一尺二寸よりあり式の大尺ともいふは今の小尺
 尺故に式の大尺ハ即今の曲尺ありて一尺なり是は唐
の尺式の小尺ハ一尺今乃曲尺八寸三分三厘三毫強
は亦唐の玉尺とあり玉按に和銅六年二月始制度量等類
 同四月頒天下諸國此尺より以前は用し尺を改め度
 地尺は用し高麗尺の大尺と傳て是までの小尺とけ大
 尺ともいふ此とゆへ度地以下の常用尺としこの一尺を
 六分割てその五分分と名せしハ寸三分三厘三毫餘乃
 尺と小尺とし此とハ尺畧景と別正湯藥と合さるるの

之用と云ふと乃延喜雜式に載るる如きあり而も世俗に
 一尺ハ大尺の二と傳へるると云ふは雜令に田五
 尺為歩と格に田六尺為歩あるを以て訝て紛々説と
 弁して明證あり今の五尺ハ今の曲尺一尺二寸と一尺
りて云ふととを格の六尺ハ今の曲尺一尺二寸と
るあり而も荷田氏始て明辨やり律原發揮等に舊尺と
 て今大和法隆寺に在るもの圖を以て魯般の尺とて聖
 徳太子之を傳へしと云ふ然とも之を天下に通用せし
 ものと云ふるを類聚國史養老四年五月頒尺様于諸國
 と云ふと云ふ尺式のきたりて實に今所用の曲
 尺ハ即式の大尺よりして今の小尺あり 今尺様 曲尺

各より前の籬と類して其物の同かきと按ひ延喜式に
 漉籠シクミコの註に漉シクミハ雜イロノ煤ノ餅料モチとあり今の網杓子の六とよ
 り又和名鈔に漉水囊シクミブルヒといふのハ漢までハ水羅馬
 尾節漉囊シクミといふのあり

蓑笠

書紀○蓑ハ身ミ荷カありあり新撰字鏡蓑とル乃と刻り
 蓑ハ艸衣ノの二分也今於志シ加カ美ミ檜ヒノ塙ノ五月ノ晦ノ日ノ
 子シ蓑シ延ニ山ノにマあリづル人トと送りて雨ニまシはルるノふノの山
 子シ長シぬスすルあリふシみツれノをモ晴クくニ○笠ハノ鬻ノとハおハ
 川ノ同シ万ノ葉ノ石ノ川ノ乙ノ丸ノ考ノ雨ノうルハノ着ノんトおハ
 つルかシの山人トふシやシを濡れハひハくル
 阿ノ袁ノ袋ノ艸ノ紙ノ○蓑ノ乃ノ異ノ名ノありト通ノ證ノみ素
 蓑ノ笠ノ毛ノ詩ノ○事ノ文ノ類ノ聚ノ農ノ夫ノ不ノ為ノ水ノ
 早ノ輟ノ耕ノ農ノ蓑ノ圃ノ笠ノ共ノ談ノ壠ノ畝ノ間ノ 艸ノ衣ノ 玉ノ篇ノ○古ノ詩ノ
 春風動艸衣

襪ハ襪ハ管子ノ首ノ戴ノ茅ノ蒲ノ身ノ服ノ襪
襪沾ハ躄ハ塗ハ足ハ謂ハ之ハ農

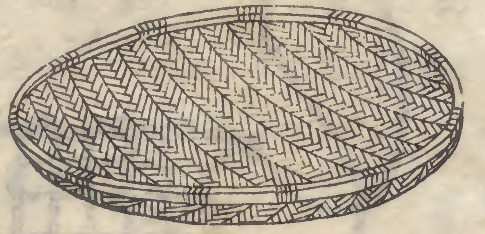
蕃名

此ノノの専田家の要具あれを田笠田蓑とてツル製シ茅ノあ
 菅ノあり亦シ櫻ノ桐ノ蒲ノ葵ノとわハ式ハハハ蓑ノ笠ノ登ノ美ノ蓑ノあハ
 皆ハ物ハはハつハいてハ名ハ呼ハつハりハ太ハひハりハ素ハ我ハ鳴ハ尊ハ風ハ雨ハふハ
 くにハ蓑ハ笠ハさハむハひハ辛ハ苦ハつハりハくハるハはハあハらハむハさハくハ
 つハありハきハあハふハとハ風ハ土ハ記ハハハ蘇ハ民ハ将ハ来ハのハ事ハありハ皇ハ身ハのハ
 御ハ身ハとハてハ草ハ衣ハかハりハせハあハひハるハのハ沛ハ心ハとハ用ハられハしたハ
 しハあハるハのハいハさハほハしハるハらハるハるハりハ高ハ麗ハ樂ハ部ハ子ハ蘇ハ
 志ハ摩ハ利ハありハ此ハ曲ハ一ハ名ハ廻ハ庭ハ樂ハ蓑ハ笠ハとハきハてハ舞ハつハりハ進ハ雄ハ尊ハ

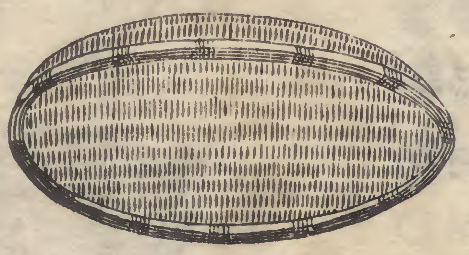
て坤國言の如くつひあやうとと又和訓葉よと素襷の
 音と較しつるさうもの二大家のいり考へかたまり
 りるまやかたは事いと多り又襷と字鏡よ古くも
 と別々のい上た乃製乃衣といふさうもや万葉八尋に
 ひまいつひささるるあると流乳のりりりつとるねら
 んとあり

古
 書紀の凡物と盛容とのとあつた籠箱の類
 皆多ふに書紀の簀と古く初ハ蓋は孫多
 籬の竹輿乃事といふり今持籠竹持籠竹よては
 塵取糞塵と取已除くとの釣夢遮帳乃と
 夫利西

竹籃



竹箕



師兜

三乃乃めり

かみれ

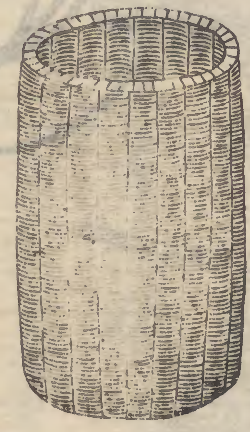
庭ハ

むりく

おひぬ

みまよ

日較とつ



篠

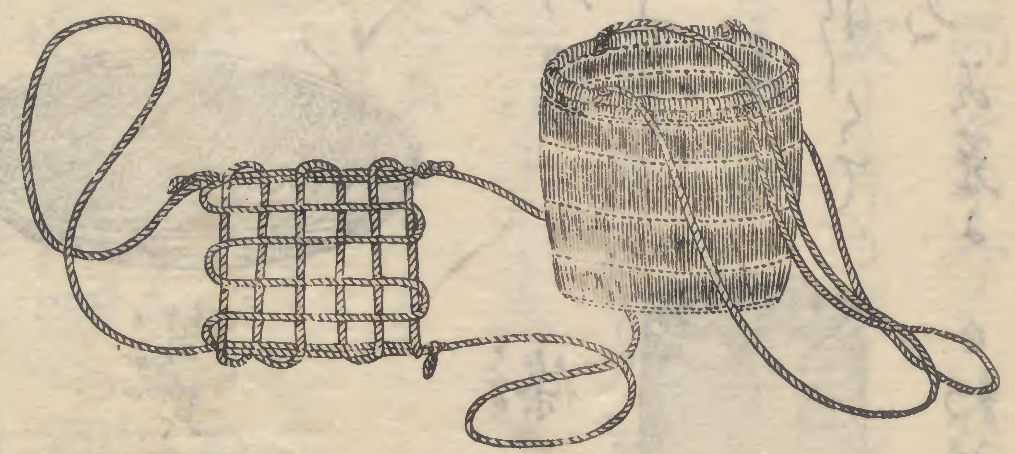


譽田八幡縁起箕之圖

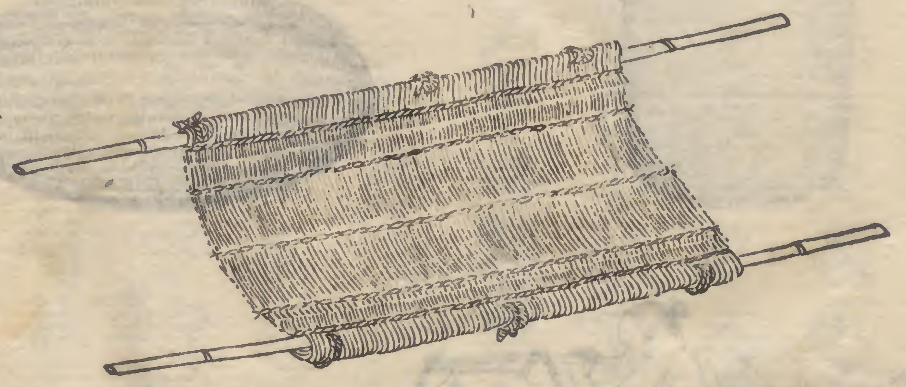
成形圖說卷之十四

畚モン

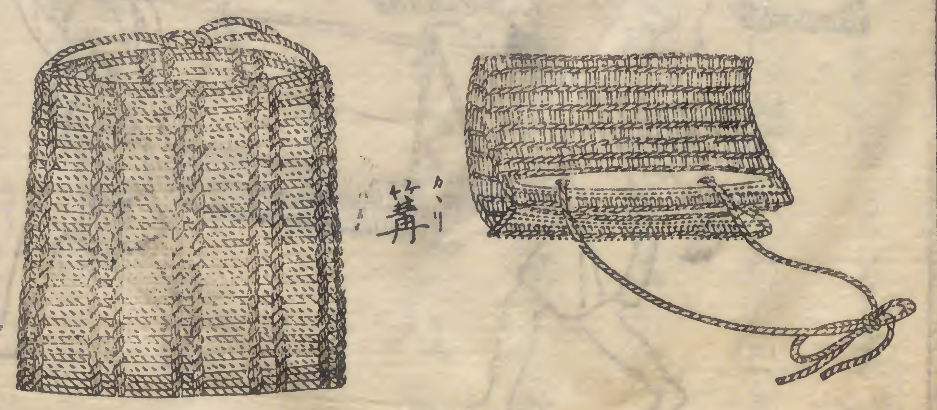
輕籠カレコ



繩篩ナハラス



箕カ



篲ク

音價亦作櫃篲正韻土籠也。書旅整為九。○論語未成一篲止。

藁裡子カ

註藁土籠也。標土籠也。

蕃名ダラパイヘル

和名鈔今按曰篲亦用篲字見史記と云るし仁德紀

其土工興させ給ふは此のよて土運ひぬと云れハ土

感する意とも古よりひりるり角し三才圖會農政全書

等の圖譜に併考すハ竹箒の長高くても今此方の土運

ハ人等とは水と量るハ背に負ひつゝとの為ハ也

西州の俗行ふくはとと篲と云ハ即抄にて編者

畚のあつて共ハ土感思と云るハ此のハ

成形圖說卷之十四

三十四

簀亦篇におふりきやうよひいりあふん今簀の左衣の
 竹と信添てあふりて塵土をもち運ぶやうなありしは
 とハ持籠りつり即土舉り又た玉掃りといふは作
 輿といふの輶輿といふものもあつたり

布古

夫木葉の形乃ふあまのうけり
 夫木葉の形乃ふあまのうけり

輕籠

畚 音本古文畚左傳趙盾已朝而出有人荷畚自閨而出者
 註畚盛土器以草索為之○周禮挈壺氏挈畚令糧註畚
 所以盛糧之器○晉書王猛少以鬻畚為業○三才圖會
 畚以蒲葦索為之○洞冥記李克自言三百歲荷草畚
 蕃名 ダラーガコルフ

此の草具として用ハ前の簀と異なり又畚として
 單座のり四隅四緒と着て土及び米穀貨物瓜荷
 の持と輕籠といふ

阿自

加和名鈔○蓋葦籠より字鏡ハ簀とよめり又篇圓

草籠

今田家の者或背負
 或提攜もの足り
 猫飼

籜

音掉同菝說文草田
 器○論語註籜竹器

蕃名

コルフ

加賀利 和名鈔 ○薰篋及の庭燎と名とおふし共子生

庭燎ハ漢ハハくやくと通ふ光明と稱せり

篋 音鉤亦作籊和名鈔引説文竹器也 ○按字典負物籠類

者操一豚蹄酒一盃 而祝曰既篋滿篋

蕃名 ストロローマント

此の紙縷して製しふと負篋と云ふハ脊子負ふ

のあり又中索よて編と肥篋と云ふ眼粗し農圃にて

駄荷とも負擔ともなりぬき用一なり以蓋此の竹

あぐりて形の燎の受骨も董籠の圈眼もと似たり力

之を字といふくせり

伊佐留 新撰字鏡 ○甲斐人ハ今と云ふ

伊加伎 集 麻笥 字延喜式ハ尺由梅ノ和名鈔引本朝

と阿己志くハハ笥笥の意或曰ハハ竹笥ハハ

笥と云ふハハ世字笥 物類稱呼 ○蓋麻笥の轉

筥 儀禮註筥番種類也其容蓋與篋同揚子方言篋南楚

蕃名 マンチー

加多美 漢語鈔 ○堅筒篋の畧あり篋ハ物と盛るり

手籠 取柄ハ 篋籠 竹革籠

みハ一本のあふせりこみとるるなり

苞鉤 俵懸

搭爪 農政全書上用鉄鉤帶撻中受木柄状如彎爪以標草木之束或積或擲以萬數速於手摯

是米苞淺荷負らる者其扛卸の便なり

俵に繩を指と挿より最速なるり取置り又繩針といふ

者何れ俵と結よりけりし繩乃端と針孔に紐して其

約本より便なるなり

擔股 股振 股棒 夜須

杖 音又説文杖枝也岐枝木也是周禮註以杖刺泥中捕魚又杖柄ありといふ

又杖柄ありといふ

檐と依須とと称ハ檐頭に岐枝あり本は用ひし名歟

名鈔引切韻椽屈木為之和名佐須衣と食等かて須衣ハ

の椽乃名葉子折と云の内匠式御飯切り又折櫃あり

飯櫃あり椽ハ箱と通杖と云毛蓋籠の盛也通杖と椽也

椽と毛比椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云

椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云

椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云

椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云

椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云

椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云

椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云椽ハ椽と云

波

良 天武紀大角小角鼓吹旌幡弩抛等之類不應

成形圖說卷之十四

三十八



久太 同上○字鏡
 管乃笛 和名鈔小角
 筒貝 和訓禁竹

俗云此々其々を以て呼ぶ也
 籥 ○樂書 籥 簧及 籥 為 作 休 之 節 令 闌 闌 欲 相 彌 令 吹 指 為 節 一 曰 竹 簫 洛 陽 亭 長 所 吹 角 ○和名鈔引兼名苑注角本出胡中 演繁露云黃帝吹角為龍鳴

蕃名ブラアスル

凡じーは道路鼓角と鳴し儀仗に備ふし律令に又

えりて彌令の節に亦吹器の已後世も哮囉と用ふ蓋

戦國の遠風しし之と鼓吹は物ふあり万葉に鼓の音

ハ雷のやと吹かす小角のおとと泳り

志日本考云每隊相去一里 吹海螺為號相聞即合救援 遂は里正所驛亭長等の人 備武

馬^{ヨヒ}越^{イダ}來^イし用^イ事^マと告^イ示^マし或^ハ土^フ本^{レン}の工^タ役^ミ下^ホと使^スふの處
 或^ハ夫^オ越^オ矣^コし工^ヤと歌^スひれ^スも皆^カ蠶^カと吹^テ其^シ號^ケ令^チと傳^フふ
 是^ハ蓋^シい^ハく^ハの角^カ箴^ク小^シ代^トするの^ハ秘^ヒ藏^ク抄^シよ^ク
 くれハ葛^カ城^シ山^ノ乃^ハ高^ク嶺^{ナリ}ありありとく^ハは^ク音^ハ次^ニふ
 且^レ今^モも馬^ノ逐^ル席^ヲ物^ヲと^シ法^ノ螺^ト吹^テ列^セ年^トと稱^リ信^ス凡^ソ
 事^トと^シる^ハ山^ノ伏^トと^シ又^ハび^リは^レ時^ノの鼓^ト
 とも貝^ヲ吹^テ稱^リる赤^ノ深^ノ清^ノつり集^メ今日^ハも^ハ午^ノの貝^ト
 こと吹^レの^ハれ^ハび^ハつ^ド乃^ハあ^ハゆ^ハと^ハ追^ヒは^レさ^レる^ハ精^ハ吟^ハ自^レ記^ト
 小山^トて^ハる^ハる^ハの^ハう^ハい^ハふ^ハく^ハを^ハに^ハなり^ハま^ハる^ハと^ハ
今^ハ去^リる^ハ家^ノ言^ハふ^ハる^ハ也^ト
小^ハ晨^トと昏^トに貝^トとハ吹^レぬ^ハ文^ノ獻^ノ通^ノ考^ノ云^フ梵^ノ貝^ト今^ハ之^ノ梵^ノ樂^ノ用^ス之^ヲ以^テ和^シ銅^ノ鉦^ヲ釋^ノ氏^ノ所^ノ謂^フ法^ノ螺^ト赤^ノ土^ノ國^ノ吹^レ螺^ヲ以^テ迎^フ陪^ノ使^ト是^レ也^ト梁

武^ノ之^ノ樂^ノ有^ル童^ノ子^ト伎^ノ倚^ノ歌^ト梵^ノ貝^ト ○凡^レ工^ノ役^ノの處^ニ其^ノ所^ノ由^ヲと識^シて旗^ヲと建^テ今^ハ
 の表^ニ本^ノの^ハお^ハとし天^ノ武^ノ紀^ノの旗^ノ幡^トと兵^ノ軍^ノ憲^ノの^ハと^ハあ^ハる^ハる^ハ
 と^ハあ^ハる^ハく^ハし周^ノ禮^ノも^ハ起^ル野^ノ役^ノ各^ノ率^ヲ其^ノ所^ノ治^ル人^ノ至^リ大^ノ旗^ノ之^ノ下^ニ
 ○凡^レ舟^ノ土^ノハ鑼^ノ擊^カつ^トと^ハあり^ハ一^ノ間^ノ先^ハハ出^ル
 の間^ノも^ハなり^ハん^ハ灰^ノ沙^ノの^ハや^ハう^ノま^ノの^ハ衣^ノ囊^ノ頭^ノ髪^ヲ種^々々^ノ海^ノ中^ニ
 あり^ハハ船^ノノ^ハ方^ノ角^ノ一^ノ向^ノと^ハあり^ハと^ハなり^ハゆ^ハ之^ノ小^ノ舟^ノ數^ノ不^レ數^ト毎^ト
 小^ノ舟^ノハ出^ル時^ノハ其^ノ頭^ノ船^ノ一^ノ組^トつ^クと^ハあり^ハて^ハあ^ハつ^クと^ハあり^ハと
 や^ハあ^ハる^ハと^ハあり^ハ時^ノハ頭^ノ船^ノより^ハ呼^レ囉^トと^ハ吹^レき^ハ音^ノと^ハ便^リと
 小^ノ舟^ノハ出^ル時^ノハ頭^ノ船^ノより^ハ呼^レ囉^トと^ハ吹^レき^ハ音^ノと^ハ便^リと
 人^ノハあ^ハる^ハぬ^ハ事^ノあり^ハ



成形圖說卷之十四終

Faint handwritten text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side of the page.

